

「クリスチャンの二刀流」 使徒言行録6：1～7

I 導入部

おはようございます。7月の第四日曜日を迎えました。3週間のご無沙汰です。私は2回外部でのご奉仕で、青葉台教会では岩淵兄、塚本良樹先生にご奉仕していただきました。

久しぶりに、愛する皆さんと共に会堂に集い、あるいはライブ礼拝を通して、共に礼拝をささげることができますことを心から感謝致します。

東京2020オリンピックも始まりました。いろいろな課題や問題があり、開始直前までいろいろな出来事がありました。コロナ禍に中であってオリンピックを開催するということは大変なことです。今までに経験したことのないオリンピック、歴史的に記憶に残るオリンピックになると思われます。私たちは、コロナ感染が気になりますが、開催されましたので、各選手の競技に応援したいと思います。

海の向こうアメリカでは、アメリカ大リーグのエンジェルスの大谷翔平選手が大活躍しています。ピッチャーとバッターの二刀流ということで話題になり、結果を残しています。現在、ホームランダービーでは1位です。ピッチャーとしてだけでも、バッターだけでも結果を残すことは大変なことなのに、彼は、投げて打って、走っても超一流なのです。彼の人気は、実力だけではなく、彼の野球や生き方そのものの姿勢にアメリカの人々は感動しています。バットが折れたら、折れたバットをわざわざ拾ってバッターに渡してあげたり、球場にゴミが落ちていれば拾ってズボンのポケットに入れたりします。彼は自身の本で語っています。「**他人が何気なく捨てた運を拾う。**」と。他の選手のしないような、ある意味では当たり前なことを当たり前にする紳士的な姿勢が魅力なのだと思います。後半戦、三振が多くなり疲れているのかも知れませんが、頑張してほしいと思います。アメリカに住んでいるアジア系の人々は、大谷選手の活躍に励まされているようです。

二刀流と言えば、宮本武蔵の二天一流です。武士の持つ刀というのは普通は、両手で1本を持ちますが、宮本武蔵が初めて、右手と左手に一本ずつ刀を持ち二本使用するようになったのでしょうか。彼は二刀流で無敵と言われるほどとても強い武士でした。

今日は、使徒言行録6章1節から7節を通して、「**クリスチャンの二刀流**」と題してお話し致します。

II 本論部

一、聖霊に導かれ健全な教会でも問題は起こる

初代教会は数が増え祝福されました。今回の出来事は、エルサレム教会が成長していく中で起こった問題でした。聖霊に導かれた健全な教会であっても、問題は起きてくるということでしょう。教会に問題が起こることはおかしいとは言えないのです。1節には、「**そのころ、弟子の数が増えてきて**」とあります。今回起こった問題の原因は、誰かの不正や罪の問題ではなく、「**弟子の数が増えた**」ことでした。弟子というのは、信仰を持って救われたイエス・キリストの弟子という人々です。イエス様の12弟子の弟子とは意味が違います。教会に救われる人が起こされ、教会に人々が加わることはうれしい事です。今でも救われ、洗礼を受ける人が増えることは、どの教会もうれしいことでしょう。

しかし、初代教会の弟子の増加は、すごいものでした。2章のペンテコステに3千人が救われ、4章では5千人が救われました。この数は男性だけです。女性や子どもを合わせると数万人になります。ビックリするような数が教会に加えられたのです。

また、1節には、「**ギリシャ語を話すユダヤ人から、ヘブライ語を話すユダヤ人**」とあるように、同じユダヤ人でも話す言葉が違いました。話す言葉だけではなく、文化や生活習慣の違いもありました。ヘブライ語を話すユダヤ人は、話し言葉はアラマイ語だったようですが、もともとユダヤの地で生まれ、自分の国から離れたことがなく、そこでずっと生活していた人々で、ユダヤ人としての習慣を守り、旧約聖書の律法を大切に、神殿の儀式などを重んじていた人々でした。

ギリシャ語を話すユダヤ人は、ユダヤの国を離れて外国に住み、そこで生活していた人々でした。彼

らは、ユダヤ人以外の世界の人々と接し、様々な文化や新しい思想に触れて生活を送っていた人々でした。ヘブライ語を話すユダヤ人たちは、自分たちこそ生粋のユダヤ人であり、外国の文化や習慣に触れたユダヤ人を軽蔑するような傾向があったようです。

この2種類のユダヤ人が共に生活し、信仰生活を送ることになり、様々な違いのゆえに、受け入れられない状況があったように思います。

1節の後半には、「それは、日々の分配のことで、仲間のやもめたちが軽んじられていたからである。」とあります。「軽んじられていた」とは、「見落とされていた」とか「後回しにされていた」という意味があるようです。ギリシャ語を話すユダヤ人の中には、敬虔な人々は、年を取ると、やはり聖なる都エルサレムで最期を迎えたい、葬られたいという強い希望があって、祖国ユダヤの国に引っ越してくる人々が多いたようです。夫婦で引っ越してもご主人を亡くしやもめとなる人々も多いたようです。そのようなギリシャ語を話すやもめたちが、日々の配給で軽んじられているという苦情が出てきたのです。同じ信仰を持っていても、環境や文化や習慣の違いのゆえに、また、数が増えてきたという状況の中で、健全な教会であっても問題が起こってくることを聖書は示しています。そのように問題が起こった時、私たちは何を大切にするのか、聖書から見たいと思います。

二、真の問題に気づく

ヘブライ語を話すユダヤ人の中には、また、やもめの中には、イエス様のお母さんであるマリア、イエス様に仕えていたマグダラのマリア、ヨハナ、スサンナ、ヤコブの母マリアなどがいました。彼女たち自身は、女性としてやもめたちに対する日々の配給を手伝っていたのでしょう。そのような中で、彼女たちは、自分たちの言語の違うギリシャ語を話すやもめたちとの言葉の壁は厚く、理解できないことが多々あったのではないのでしょうか。やはり、顔見知りのヘブライ語を話しやすいやもめたちには、行き届いた配給ができたでしょう。しかし、言葉の分からない、生活習慣や文化の違うギリシャ語を話すやもめたちには、本当の必要が理解できず、表面的な配給がなされていただけなのかも知れないのです。そのような状況の中で、苦情が出てきたのです。

しかし、今回の本当の問題は、弟子の数が増えた事や言語や習慣や文化の違う2種類のユダヤ人の問題ではありませんでした。勿論、それらのことも影響していたでしょうが、本当の問題は違う所にありました。

2節から4節を共に読みましょう。「そこで、十二人は弟子をすべて呼び集めて言った。「わたしたちが、神の言葉をないがしろにして、食事の世話をするのは好ましくない。

それで、兄弟たち、あなたがたの中から、“霊”と知恵に満ちた評判の良い人を七人選びなさい。彼らにその仕事を任せよう。わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」 「神の言葉をないがしろにして」とあります。新改訳聖書では、「神のことばをあと回しにして」とあり、口語訳聖書では、「神の言をさしおいて」とあります。使徒たち自身、本来彼らが最も重要とすべき神の言葉を教えること、語ることが、日々の配給や様々な働きをしていたので、十分なされていなかったということを彼ら自身が感じていたのでしょう。

初代教会の成長は、瞬く間に、聖霊が与えられるように共に祈った120名から数万人に増加したのですから、多くのやもめや生活できない人々を抱えていて、神の言葉を語ることや神の言葉を教え、御言葉で養われるように導く働きよりも、今日食べ物を必要としている人々のために、時間も労力も、思いがとられていたのです。ギリシャ語を話すユダヤ人たちから、やもめの配給で苦情が出た時、弟子たちは、食事の配給の仕方や配り方、人員や日程などを考え直すというのではなく、この問題の根本的な理由、真の理由は自分たちにあること、自分たちがみ言葉を後回しにしていたこと、神の言葉をないがしろにしていたことを悟ったのです。「ないがしろ」とは、「ないに等しいもの」という意味があります。「ないに等しいもの」と考え、感じるので、軽んじたり、あしらったりしてしまうのです。それほど、忙しかったのでしょう。日々の配給の働きが壮絶だったということでしょう。「食べ物の恨みは恐ろしい」と言いますから、大きい小さい、多い少ないで喧嘩になります。仕事もなく、頼る人もなく、慣れない土地で日々の生活を毎日の配給によって生きていくギリシャ語を話すやもめたちは、今日生きるための配給の順番が遅くなったり、配られなかったりしたら死活問題なのです。慣

れない土地での生活に不安があり、恐れがある中で、配給そのものに対する苦情やヘブライ語を話すユダヤ人に対する怒りや憎しみが生まれてきたように思います。

そして、それが、イエス様が言われたように、「『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』／と書いてある。」(マタイ4:4)とイエス様ご自身が聖書の言葉、神の言葉を大切にしておられたのです。人はパン、食べ物を通して生きる者だけれども、食べ物だけがあればいいというのではなく、神の口から出た言葉、聖書の言葉、神の言葉で生きる者になるのです。弟子たちは、その事に気づいたのではないのでしょうか。私たちも、忙しさのあまり、することが多くあるあまり、御言葉に触れること、御言葉を読むこと、御言葉で養われることをないがしろ、「ないに等しいもの」と思ってしまい、日々忙しくしているのではないのでしょうか。そうならば、やがてほころびが出て来るという事を今日の聖書の箇所は私たちに教えているのです。

三、優先順位を間違わないように

そして、使徒たちがみ言葉に専念できるように、7名を選びました。その選びの基準は、「**霊と知恵に満ちた評判の良い人**」でした。日々の配給の働きは食事の世話という低い仕事なので、そういう仕事は使徒ではない人にやらせようというわけではありませんでした。また、日々の配給のできる人を選ぶだけならば、実務能力の高い人、そのような経験豊富な人、仕事が良くでき、よく気がつき、優秀な人を選べばよかったです。しかし、この働き、日々の配給の仕事は、ただ物質を運ぶ、手渡す、こなすというだけではなく、優先的にどのような人に配布するのか、あるいは、誰が本当に困っているのか、本当に必要としているものは何なのか、を知るためには、技術的なこと、人間的なことに、よくできたとしても、また同じ問題が起こることでしょう。だから、「**霊と知恵に満ちた評判の良い人**」を選んだのです。「**霊と知恵に満ちた評判の良い人**」とは、配給には知恵が必要で、その知恵の前には霊に満たされていること、神様に求め、神様に仕え、へりくだり、神様を愛している人です。多くの知恵を神の視点から応用できるように、神の知恵が必要です。その知恵は、祈りを通して与えられるのです。それは、神への願い、求めの祈りではなく、静けさの中で集中した神様との親しい交わり、聴く祈り、つまり、ディボーションだと思います。また、教会の中だけで、評判が良いという人ではなく、世の中の働きにおいても非難されることのない人です。

「7」という数字は、両者が同数にならない数です。「10」とか「8」だと「5:5」とか「4:4」というように同数に調整すればよいというものです。しかし、教会という所は、人間的な調整や実務を求めるのではないということでしょうか。政治的な解決ではなく、あくまでも、人間的な解決ではなく、神の霊と知恵によって問題を解決することを選んだのです。

7人の選びは、使徒たちのみ言葉の働きの優先のためであり、実際、7人はそのために用いられました。み言葉に仕えるという点では、使徒たちも選ばれた7人も、全く同じ働きをしたのです。

4節には、「**わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。**」とあります。リビングバイブルには、「**そうすれば私たちは、祈りと説教と教育に打ち込むことができます。**」とあります。4節の「**わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。**」という言葉は、使徒たちが、神の言葉を人々に語ること、教えること、御言葉で養う事、そして、祈るという奉仕を何よりも優先すること、また、教会全体が、教会に集う全ての人が、神の言葉を聞くことを最も大切にしていこうということの決心なのです。

教会が神の言葉を大切に、そのために祈りとみ言葉の奉仕に、使徒たちが専念できるように、教会全体が礼拝や祈り会、祈りとみ言葉を何よりも大切にするために、7人を選び、日々の配給の働きを任せました。

「**祈りと御言葉の奉仕に専念**」するとは、どのような問題が、教会に起こってきたとしても、教会の土台、中心である働き(祈りと御言葉)を二次的な位置に置くことはしないという意志決定なのです。このことこそ、教会に問題が起こった時、起こる前に対処する原則なのだと思うのです。私たちは、教会に、自分自身に問題が起こったから、「**祈りと御言葉の奉仕に専念する**」というのではなく、日々、いつものように、当たり前「**祈りと御言葉の奉仕に専念する**」歩みをしたいものです。

III結論部

健全な教会でも問題は起こることを今日の箇所は語ります。また、教会に起こる問題の多くの場合は、良い事をする事において起こるものだと思います。一生懸命に奉仕を、良い事をしようとして、私たちは失敗しやすいのです。会堂建築という良い働き、良い事の中に、対立や分裂が起こると言われます。伝道しよう、宣教しようという事のために、誰を講師に選ぶかで、対立が起こり、チラシの内容や表現で対立が起こります。私たちは、宣教や教会のために良い事をしていると思っている時こそ、傲慢になりやすい者であることを忘れてはならないのです。そのような対立が起こるのは、やはり、祈りとみ言葉の欠如から来ているのでしょうか。私たちが「**霊と知恵に満ちた評判の良い人**」という聖霊の導きに取り扱われていない時、人間的な何かで行おうとしている時に、問題が起こるのだろうと感じるのです。

私たちは、福音を通して、自分の罪を認め、その罪の身代わりにイエス様が十字架にかかり死んで下さり、よみがえられたことを信じて、私たちは罪が赦され、魂が救われ、永遠の命が与えられたのです。クリスチャンとされた私たちは、クリスチャンの二刀流、祈りと神の言葉で養われて、霊的にも人間的にも成長したいと思うのです。この週も聖霊の導きの中で、祈りとみ言葉に専念する歩みでありたいと思うのです。礼拝と祈祷会を大切に、8月の暑い月を迎えたいと思うのです。